トラークル研究

第十三号

2016年10月

トラークル協会

〒270-0122　千葉県流山市大畔237－3　三枝紘一方

Tel　04－7150－5782　　Eメール　saegusakouichi@yahoo.co.jp

1913年秋のトラークルと秋の連作詩

保坂　直之

1) 1913年秋と1914年春

1913年のウィーンの夏はいつになく気温が低かったらしい。それでも休暇（Urlaub）になれば人は海に向かうようだ。ウィーンの文人たちの目的地はヴェニスで、カール・クラウスもヘルマン・バールも同じヴェニスにいた。陸軍省の仕事が全く勤まらなかった鬱状態のトラークルも建築家のアドルフ・ロースに連れられて、8月16日から10日ほどヴェニスで保養している[1]。彼が生涯で海に触れたのはこの折のみだったが、旅は楽しみより不安をもたらしていたらしく[2]、残された写真で見る限り、水着を着て浜辺にたたずむトラークルは背を丸め表情は暗い[3]。

ヴェニスからトラークルはザルツブルクを経てインスブルックに帰る。市の中心部からイン川を渡り山の斜面に沿う道を歩くと動物公園の先、ミューラウ（Mühlau）の集落にフィッカーの邸宅（Rauchvilla）があり、トラークルは9月、10月の2ヶ月間、この家の一室を借りてフィッカー家の世話になった。9月3日にカール・レックとミューラウの近くで会い、ウィーンで作っていた詩『沿って（Entlang）』[4]を朗読した。レックはキリスト教に改宗して殉教したアウグスブルクのアーフラを話題にする。これを受けてトラークルは春先に作った『たそがれの鏡（Abendspiegel）』[5]を元にして『アーフラ（Afra）』[6]というソネットをすぐに作った[7]。

『沿って』も『アーフラ』も詩集『夢の中のセバスティアン』の2つ目の連作「孤独な人の秋」の詩である。『沿って』の前には『ソーニャ（Sonja）』[8]という詩が置かれて、この2つの詩はどちらもヴェニス行きの前、ウィーンで書かれてヴェニスから戻った8月末から9月1日・2日までの数日間にザルツブルクで手が加えられている[9]。『沿って』と『アーフラ』の間に置かれた『秋の魂（Herbstseele）』[10]も、涼しかったこの8月末から9月初めに成立したと推定される[11]。『ソーニャ』と対になっている詩『呪われた者たち（Die Verfluchten）』[12]はこの年の5月の稿と11月に印刷された稿とで若干の違いがあるので、やはり夏から秋にかけてのいずれかの時期に手を加えられた可能性がある[13]。

詩集『夢の中のセバスティアン』にある 2 番目の連作「孤独な人の秋」は 1913 年の秋の初めの短い時期に、ヴェニスから戻った直後のトラークルが集中して詩作したと思われる、この 5 つの詩を中心にして構成されている。秋に生まれた 5 つの詩の前には『公園で（Im Park）』が連作の入り口に置かれている[14]。この詩も楡の葉が金に色づく秋の詩だが、成立の時期は異なり、1 年前の 1912 年の秋に書かれたものだ。つまり秋の連作を編むにあたってのピースの 1 つとしてこの位置に呼び寄せられているのであろう。連作の末尾に置かれているのは連作の表題と同じタイトルの『孤独な人の秋（Der Herbst des Einsamen）』で、彼がザルツブルクにいた 1913 年 6 月 20 日から 7 月 13 日の間に生まれた稿を元にしている[15]。『公園で』と同様に、初秋の 5 つの詩に呼び寄せられた詩である。

こうして膨らませた秋の詩の塊の中に、トラークルはさらに「冬の詩」を連作の 2 番目の位置、『公園で』の後ろに差し込んでいる。それが『ある冬の晩（Ein Winterabend）』で、この詩の第 1 稿は 1913 年 12 月 13 日付の書簡に書込まれている[16]。トラークルは第 2 連作の中心をなした秋の詩が生まれた初秋からはかなり後の冬の詩を、やはり連作のピースとして入り口の次の位置に入れた。秋の連作の冒頭に冬の雪の詩が置かれるのは不自然でもある。編集者への書簡を見る限り、トラークルはあえてこの位置に『ある冬の晩』を入れるようはっきりと指示している[17]。恐らく連作の構成と密接につながるモチーフが『ある冬の晩』には含まれるからであろう。連作を組む効果を高めるという判断があったはずである。

このようにして 1913 年 8 月末から 9 月初めに生まれたいくつかの秋の詩に、連作の雰囲気に合う、あるいは膨らませる部品を付け加えるようにして「孤独な人の秋」連作は構成されたように見えるが、年をまたいだ 1914 年の 3 月 6 日にトラークルが『夢の中のセバスティアン』詩集の全体をクルト・ヴォルフ社に送付した時の構成は、現在我々が見ている 5 つの連作からなる詩集とは違う 3 部構成だった。ヴェニス旅行後の秋の初めに集中して取組まれた 5 つの詩も、1914 年の春の初め、3 月の時点では散り散りになっている[18]。この 3 月の構成を全面的に見直して 5 部構成に変える作業をしたのは、トラークルがベルリンから戻った後の 1914 年 4 月、5 月のことである。つまり、秋の詩が生まれた時には秋の連作の意識はなく、秋の詩は淡々とその秋に生まれていただけであり、幾らかの時を経て詩集全体の構成を作り上げる頃に、トラークルは秋の詩の連なりを発見して、改めて散り散りになっていた詩を寄せ集めて、構成の効果を意識しながら冬の詩もそこに組み入れて「孤独な人の秋」の連作を作った、ということになる。

2) 詩集の構成と第2連作の構成

トラークルによる活字となった2番目の詩集である『夢の中のセバスティアン』の構成を改めて確認したい。詩集は4つの詩群（Zyklus）と1つの独立した散文詩からなる5部構成である。詩集と同じ表題をつけられた最初の15篇から成る「夢の中のセバスティアン」詩群に続いて、8つの詩から成る「孤独な人の秋」が置かれている。この詩群が連作詩（Zyklus）として統べられていると言うためには、所属する詩を束ねている共通の構成要素の有無を見る必要があるが、「夢の中のセバスティアン」においては自伝的な詩を集めて構成されていること、「エーリス」や「聖セバスティアン」などの男性の人物形象が詩群の重要な「登場人物」であること、そして定型的な詩で構成された「孤独な人の秋」の詩群と照らし合わせるとはっきりと分かるのだが、脚数がまちまちな詩行からなる自由韻律の詩による詩群であること、という共通項が明らかである。

一方、韻律の面で言えば第2連作の「孤独な人の秋」の方には4脚の短いリズムの詩が集められて、「登場人物」は一転して「ソーニャ」「アーフラ」という女性たちになる。確かにリルケのオルフォイス・ソネットのような短い期間に一気に生み出されたツィクルスとは違い、成立時期の遠いものも入れ込むようにして組み合わされた塊であり、それぞれの特徴をはっきりと確認できる組み合わせ方からは、第1連作であれば15篇の詩、第2連作であれば8篇の詩を、特定の向きに編もうという構成意図がうかがわれる。その結果生まれた連作の4つと1篇の散文詩によってこの第2詩集の全体を形作ろうとしていたトラークルによる編集の意思が認められる限り、その意思を踏まえて詩集『夢の中のセバスティアン』の詩には接する必要がある。

各作品の成立時期という点で言えば、実は第1連作「夢の中のセバスティアン」と第2連作「孤独な人の秋」は1913年の春から秋にかけて書かれた詩を集めたものであり、連作の詩の7割が1913年から1914年に変わる冬に成立したのが第3連作、同じく半数を超える詩が1914年3月以降に書かれたのが第4連作である。これを踏まえて個々の詩の成立時期がこの4つの詩群の区分けに影響している、と大掴みすることもできる。もちろん、例えば第3連作は他の連作では使われることがないSchwester（妹）の語を含む詩が繰り返し現れ、第4連作では第1連作に登場した少年エーリスとヒヤシンスを再度呼び出すなど、各連作に構成としての意味を持たせようとする意図は明白なので、成立時期はツィクルスへの詩の区分けの主たる根拠ではないだろう。

また、前述したように 1914 年 3 月初めの時点でのセバスティアン詩集の構成方針では、詩は成立時期とは無関係に配列されていた。この 3 部構成案を 5 部構成に改める作業において、トラークルは 4 つの連作詩を統べる共通性とそれぞれを分ける隔たりを改めて発見したのであろう。その発見に沿って再配置をした結果、4 つのツィクルスはほぼ成立時期に沿った塊を結果として構成したのである。トラークルは草稿に日付を入れて管理していたわけではないので、成立時期に合わせて機械的に再構成をしたわけではないだろう。端正な構成の秋の連作が組めることに、トラークルは 1914 年の春に気づき、拾い集められた詩は結果的に前年の初秋に作っていた詩であった、ということである。

いずれにせよ結果としては第 1 連作と第 2 連作はほぼ同時期に成立した詩を 2 つに分けたものであり、その区分けの根拠は前に述べたリズムの違い、つまり自由な韻律の詩か主に 4 脚の定型詩か、男性の人物形象で束ねるか女性の人物形象に連なるか、などによっているのである。第 2 連作では「ソーニャ」「アーフラ」という 2 人の春をひさぐ女性が核になっていることもはっきりしている。この 2 つの詩の前後に何を置くか、が構成のポイントということになる。

前節で確認したように、初めに小さめの詩（Im Park）が置かれて連作の扉の役目をしているようである。その冒頭の「再び…（Wieder…）」という語が効いていて、一度閉じた第 1 ツィクルスが第 2 ツィクルスで再開したことをまず伝えてくる。連作の最後の詩（Der Herbst des Einsamen）には Weiher(spiegel)（池）、Rohr（葦）という扉の詩と共有する語があり、孤独な人が池辺を散策する情景で連作の円環をつないでいるようだ。

『ソーニャ（Sonja）』、『アーフラ（Afra）』という 2 人の女性を主人公にした詩は、連作としての主題を暗示する中ほどの位置に置かれている。そして『ソーニャ』、『アーフラ』のそれぞれの前に置かれた詩、『ある冬の晩（Ein Winterabend）』と『秋の魂（Herbstseele）』はどちらも「パンとぶどう酒（Brot und Wein）」という語を最終節に置いて閉じられている。すでに述べたように『ある冬の晩』は、1913 年の 8 月、9 月に取り組まれたこの連作の他の詩と比べて書かれた時期は遅く、一度トラークルがインスブルックを離れてウィーンに滞在してから再びインスブルックに戻った後の 12 月、冬の時期の詩である。このウィーン滞在時以降の冬は、トラークルが主に第 3 連作の詩に取り組んでいた時期で、『ある冬の晩』をその第 3 連作を作った詩の中から 1 つだけ取り出して第 2 連作のほぼ先頭部分に置き、『ソーニャ』と関連づけたと考えられる[19]。「パンとぶどう酒」と「ソーニャ」「アーフラ」という二人の女性形象の関係は詩の位置関係から見て第 2 連作を性格づける、トラークルの明白な意図とつながっているようだ。しかもこの詩は冬の詩であり、「孤独な人の秋」という秋

の連作詩群には本来入らないはずである。秋の詩群の中に力ずくで冬の詩を入れた、とも見える。彼が 1914 年の 6 月に行った『ある冬の晩』の詩集における位置の変更の指示は、第 2 連作においてこの詩がこの位置になければならないという、構成感覚に照らした強い意志がトラークルにあったことを示している。

第 2 連作自体が明らかな 2 部構成であると見ることもできよう。キリスト教の秘蹟を連想させる「パンとぶどう酒」のモチーフは連作の 2 番目（『ある冬の晩』）に現れ、連作の 3 番目の詩（『呪われた者たち』）にある「ソーニャ」への言及を経て連作の 4 番目の『ソーニャ』につながる。連作はここで一旦切れて、連作の 5 番目の詩『沿って』が扉の詩として『公園で』（連作の 1 番目）に呼応し、続く連作 6 番目の『秋の魂』は「パンとぶどう酒」のモチーフを持って『アーフラ』（連作の 7 番目）につながる詩であるから、『ある冬の晩』（連作の 2 番目）と呼応していると見ることも可能だ。『ソーニャ』を中心とした前半のモジュールと『アーフラ』を中心にした後半のモジュールを組み合わせて構成されているという見方である。第 2 連作の 2 番目の詩と 6 番目の詩は「旅路」（Wanderschaft, Wandern）、「痛み」（Schmerz, Pein）という共通のモチーフを持っている。つまり 2 つのモジュールは、（散策）＞（旅路と痛みと「パンとぶどう酒」）＞（女性主人公の登場）、という展開を共有した並行関係にある。第 2 連作にのみ頻度の高い語（連作の特徴語）も散見され、例えば色彩語で言えば rot（赤）は出現頻度を見る限り第 2 連作のための色であり、ソーニャの傷口やアーフラの微笑む口を赤で染める[20]。

以上のような作り込み方を見る限り、トラークルによる連作構造への意識の強さは明らかであろうと思われる。

3) 3 つの詩の解釈

トラークルは自らの詩作上の心得や方法についてはほとんど書き残していないため、詩作の意図を探るためには作品そのものを調べる以外にない。以下でセバスティアン詩集の第 2 連作「孤独な人の秋」から作品をいくつか選び、前節までで確かめた作品の配列や成立の経緯・時期などから推察される強い構成意図を、作品の観察を通して確認する。

以下の詩作品解釈では『ソーニャ』を中心にした第 2 連作の前半のモジュールから『公園で』、『ある冬の晩』、『ソーニャ』を取り上げて、連作という全体における部分として詩作品を解釈する。

この 3 つの詩を観察することによって、連作の扉の詩から真の主人公（ソーニャ）を呼ぶための導入部、そしてその主人公を通して主題を暗示する、という連作の流れを見ることができる。同様の流れは『アーフラ』を中心にした第 2 連作の後半の塊にも認められるので、同じ単位を繰り返すリズムが、定型詩を連ねた音楽性が主導的なこの連作の作りなのである。また、『ある冬の晩』と『ソーニャ』の間には『呪われた者たち』という長い詩があるが、この詩はそれ自体が 3 つの詩を組み合わせて作られた連作詩にも見える大きな作品であり、解釈予定の 3 つの小品とは異質な存在である。『公園で』から『ソーニャ』に至るシンプルな流れにこの塊を介入させる意味については稿を改めて論じることにする。

以下では、結びつけられた詩作品が相互に影響を与えあう連作詩の特性にも注意した理解を試みる。連作形式を目指した以上、この相互作用の働きへの期待がトラークルにはあったであろうから、相互作用効果の高さが確認できれば、それはトラークルによる構成意思の強さの結果と見ることができるだろう。連作はまた、可逆的なテキストでもあるので、連作 4 番目の『ソーニャ』から遡って連作 1 番目、2 番目の『公園で』、『ある冬の晩』を読むことも必要であろう。それを受けて、1913 年秋の詩を改めてひとまとめにした 1914 年春のトラークルが、おそらくその時に発見したであろう第 2 連作を束ねる共有の何かを確認し、『ある冬の晩』の位置変更の意味も考察したい。

Im Park

Wieder wandelnd im alten Park,
O! Stille gelb und roter Blumen.
Ihr auch trauert, ihr sanften Götter,
Und das herbstliche Gold der Ulme.
Reglos ragt am bläulichen Weiher
Das Rohr, verstummt am Abend die Drossel.
O! dann neige auch du die Stirne
Vor der Ahnen verfallenem Marmor.[21]

公園で

古い公園をふたたびさまよいつつ、

おお、黄や赤の花たちの静寂。

おんみらもまた悲しむのか、優しい神々よ、

楡の樹の秋めく金。

うす青い池の辺で葦が

突き出て動かず、たそがれどきツグミが黙る。

おお、ならばお前も額を垂れよ

祖先らの朽ちた大理石の前で。

タイプ稿から見る限り、1912 年の 9 月終わりから 10 月の初めにはこの詩のテキストは存在し、内容的な変更なく『ブレンナー』と詩集『夢の中のセバスティアン』に印刷されているようだ[22]。正確な成立時期や変更の経緯などは明らかではないが、1913 年夏のヴェニス旅行直後の秋の詩より少なくとも 1 年前に生まれた秋の詩が第 2 連作の扉としてここに置かれた。詩節に切られない小品であることや微妙なリズムの揺れ[23]、2 人称への呼びかけが目立ち、同じ秋の詩であっても第 2 連作中の他の詩とは少し手触りが違う。

2 行目の gelb（黄色の）には複数 2 格のための変化語尾（er）がついていないが、音を整えるための措置であろう。名詞の Stille（静寂）は後に続く『ソーニャ』に繰り返し使われる語である。「孤独な人の秋」は「静寂」が決定的に支配している秋である。叙情主体は秋の公園でさまよいを再開する。公園につく alt（古い）という語はギリシア・ローマの「神々（Götter）」の石像にも結びついて大司教の街らしいバロック庭園の佇まいがどうしても目に浮かび、ザルツブルクを舞台にした自伝的な詩が多かった第 1 連作「夢の中のセバスティアン」が連想されるが、形としては新たな連作で新たなさまよいが始まるのである。

「静寂（Stille）」と同様に sanft（柔らかい）も『ソーニャ』との繋がりを意識させる語である。『ソーニャ』の第 2 詩節では傾く向日葵（ヒマワリ）の花の柔らかな動きを表しているが、sanft はこの詩では 3 行目で「神々（Götter）」にかかり、「神々」は温和で優しいがために死を思わせる静寂の世界の訪れを嘆き悲しんでいる、と歌われる。続く 4 行目の「楡（Ulme）」も秋めいて金色に色づいているが、Gold（金）は 2 行目の Stille と同じく動詞要素を含まずに孤立した名詞である。文を作らず

動きを消された秋景色は爽やかというよりも重苦しい静寂に満ちている。池のほとりの葦もぴたりと動かず、ツグミも息を潜めて鳴かない。不自然な動きのなさは不安を強める。「額（Stirne）」もトラークルが多用する語で、祖先の墓碑の前でうなだれる動作（neigen）は敬虔や帰依を示すものだと思われる。

「傾けよ（neige）」の命令の前の dann（それならば）はどのような意味の展開をつないでいるのだろうか。葦がピタリとそよがず鳥の声も絶えている情景は死の不気味さである。その死の気配を受け止めるのであれば、祖先の墓に行き祖先を想って祈れ、という思念の流れを作るのが dann である。それでいて同時に、auch du（お前もだ）の 2 語は文構造から離れて、dann（ここまでの死の気配の充満であるならば）、次はお前の番だ、お前も死ぬのだ、死を想え、の声を響かせているようでもある。

2 人称への呼びかけがあることも第 2 連作の他の詩と異なる『公園で』の特徴である。この呼びかけは「おお」という、思わず口をつく声も伴っている（2 行目、8 行目の 2 ヶ所）。2 行目の「おお、黄や赤の花たちの静寂」では、漏れ出てきた嘆きの声によって公園の「静寂」が嘆くべき深さと悲しさをたたえていることに気づくことになる。複数 2 人称の ihr で呼ばれるのは古代の神々で、バロック庭園であれば雨にさらされた石像が思い浮かぶ。8 行目の嘆きの「おお」は 2 人称単数の du（お前）への呼びかけで、「お前」が負わねばならないものの重さへの嘆きである。「祖先ら」という死者の気配ばかりで生きた人の気配がない。完全に孤独な世界である以上、この du は叙情主体であるはずのトラークルが自分自身に語りかけた 2 人称に見える。この詩はまさしく「孤独な人」がひとりさまよいながら嘆きの声を漏らしている情景で、「孤独な人の秋」の入り口の詩にふさわしい。

短い詩の中で 2 人称への呼びかけが 2 度響いて明らかになるのは、この詩の中には ich und du（我と汝）の関係があること、孤独なひとりぼっちであるとはいえ「私」が世界の中にいること、である。連作の中に入ると、この「私」と「あなた」の関係は見えなくなり、神の視点で第 3 者を掴もうとする構造の詩が続く。「私」さえも消えてしまったかのような寂しさの世界になる。セバスティアン詩集の第 1 連作「夢の中のセバスティアン」には、トラークル自身を主人公にしたかに見えるモノローグの雰囲気があった。2 つの連作の接点でもある第 2 連作冒頭の位置で、前の連作の私性の気配が持ち込まれて、2 つに分けたがツィクルスの世界の連続は切れたわけではないことが確認されている。呼びかけを介して「私」が入り込み、ひたすら人気のない世界にも見える第 2 連作の中にもトラークルの存在があるのだ、と示す働きを『公園で』の独り言の嘆きが示している。

Ein Winterabend

Wenn der Schnee ans Fenster fällt,
Lang die Abendglocke läutet,
Vielen ist der Tisch bereitet
Und das Haus ist wohlbestellt.

Mancher auf der Wanderschaft
Kommt ans Tor auf dunklen Pfaden.
Golden blüht der Baum der Gnaden
Aus der Erde kühlem Saft.

Wanderer tritt still herein;
Schmerz versteinerte die Schwelle.
Da erglänzt in reiner Helle
Auf dem Tische Brot und Wein. [24]

ある冬の晩

雪が窓にふると
長く晩鐘が鳴り、
たくさんの人へ食卓が用意され
家はきちんとかたづいている。

旅路にある人も多く
暗い小道をたどり戸口に立つ。
恩寵の樹は金に花咲く
大地の冷たい液を吸って。

「旅人よ、静かに入りなさい」

痛みが敷居を石に変えた。

そこでは純粋な明るさの中で

食卓のパンと葡萄酒がきらめいている。

4 脚のトロヘーウス詩行（∩－∩－∩－∩(－)）で書かれ、リズムは淡々として滑らかである。詩節の 1 行目と 4 行目は行末に強音が置かれ（男性的カデンツ）、2 行目と 3 行目は行末が強音のない音節で整えられている（女性的カデンツ）。行末の上昇・下降の型に合わせて、脚韻も abba の抱擁韻に徹している。この詩の硬い形式的な面持ちと比べてみると、直前の詩『公園で』での韻を踏まない自由な音も改めて印象的である。トラークルは詩の創作者としての技術を示すかのようにリズムと音調の使い分けをして、詩と詩の組み合わせに変化をつけているようだ。朗読を多く行っていたトラークルにとって、音楽的効果は大切なものであったはずである。自由なリズムの詩の動的な雰囲気と対比されるので、短いリズムを繰り返す 4 脚の詩行の軽やかさが際立つ。そしてその軽やかさは直前の詩から引き継いだ孤独の感情と混じりあうと悲しさをかき立てる響きとなる。

第 1 詩節は wenn（ーすると）以下の条件節で始まるが、条件節と主文の区別の曖昧さに、不可解な世界を作る作為を見る受け止め方もある。「雪が窓にふると／長く晩鐘が鳴り」と、1 行目を副文、2 行目を主文とするのか、あるいは、「雪が窓にふり／長く晩鐘が鳴るときに／たくさんの人たちに食卓が用意され…」と、2 行目まで wenn 節が続くと読むべきなのかは不明瞭にされた書き方である。どこに主文があるのか解決されずに放置されるので、夕刻に鳴る教会の鐘の音もいつ鳴り止むのかわからない不安定な余韻を鳴らす。渦の中にいるようにもなり、夢の中にいるようにもなる[25]。本稿では韻を踏むために「鳴る（läutet）」の動詞を行頭から行末に移したと考え、1 行目の末尾にはっきりと置かれたカンマを wenn 節と主文の区切りを示すものと見て「雪が窓にふると」とした。詩の音の響きに敏感なトラークルの姿を手がかりにするということである。

夕べの食卓を用意して家の中を整えるのは、「たくさんの人」を客として迎えるためのようだ。教会の晩鐘を聞きながら晩餐を準備するこの広い家には、父親の死に伴う「トビーアス・トラークル鉄商会」[26]の解散後はなかなか居場所の定まらないトラークルが、この先得られないかもしれない、「きちんとした市民階級の生活」があるように感じられる。第 2 詩節を見ると、「たくさんの人」の中に